

コトバカっ!



コトバカ
言葉家……言葉を操る専門家。言葉にバカに詳しい人。言葉にバカみたいにこだわる人。

コトのほかバカ。コトによるとバカ。コピーライターの俗称。

上から読んでも相川藍、下から読んでも相川藍。コトバカの相川藍が言葉についてコトバカるっ!

いじわれない!

書くのも得意だし、喋るのも任せてという驚異的な人が世の中にはいるけれど、私は喋るのが苦手。そんな仕事を頼まれたら、できれば断りたい。先日トークイベントへの出演依頼があり、いやもちろんやらせていたいただきたいですがかなりしちよっとどうなのかなー、とモゴモゴ言っているうちに「ご快諾ありがとうございます」と言われてしまった。へっ!? 喋るのがあまりに下手だと、断ることすらうまくできないのだ、マジで。

その点、メールならスムーズにお断りの文章が書けてしまうが、スムーズで気持ちいいのは本人だけかもしれない。礼儀正しい言葉をどれだけ美しく重ねても、結局は断っているんだから。もっともらしい理由を並べれば並べるほど言い訳に聞こえるし、また声をかけてくださいとか、次の機会にぜひとか、生まれ変わったら必ずとか書いてもねえ。しかしそれでも「ありがと」のひところは、どこかに入れたい。断り文に感謝の言葉があるとなんとは、雲泥の差だと思う。

ちなみに前述のトークイベントは、会場がお台場だったので、思いのほか気分が盛り上がった。「踊る大捜査線」ファンとしては、湾岸、お台場、レインボーブリッジというだけで頭の中にテーマ曲が流れ、走り出してしまう。見本市の会場に織田裕二が紛れていないか、つい探してしまう。

学生時代、大きな見本市会場でバイトする機会があり、私は「女の断り術」というべきものを学んだ。仲間うちに一人、別格モテ女子がいたのだ。彼女は来場者からもらう名刺が断トツに多かったが、真骨頂はバイト最終日。会場から駅まで歩く彼女に、スタッフの男たちから次々と声がかかった。メモを渡そうとする者、早口で思いを告げる者、握手を求めめる者。その間、彼女は一度も立ち止まらなかった。何も受け取らず、笑顔も見せず、手をひらひらさせながら歩き続けた。ノーの意味でありつつ、感じよく手を振っているようにも見えるその動作は完成されていた。こんな優雅な断り術、見習いたいですね。生かす機会があるかどうかは別にして!

あいかわ あい ことばか
相川 藍 (言葉家)

丸の内文学賞 (大賞)、朝日広告賞 (最高賞)、インターネット書評コンテスト (最優秀賞) 受賞。早稲田大学第一文学部卒。コピーライター。